

2022年1月9日（日）上演⑩

神奈川県立神奈川総合高等学校

「ことばだまり」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

大宮 英理（東京都立青海総合高等学校1年）

この作品は、言葉の正しさや言葉の力について、私たち高校生だけでなく大人も深く考えさせられる作品であった。

舞台上には「ありがとう」「ごめんなさい」「うざい」「あるある」そして「死ね」という名前の5人。この作品では、果たして言葉の世界に「死ね」は必要があるのか。今、1つの言葉をかけて、言葉について考える。

冒頭、ホール内に「死ね」という言葉が響いた時、ドキリとさせられた。言葉に罪は無いのに、私達は無意識のうちに言葉で人を傷つけているかもしれない。「死ね」さんが纏う儂げな雰囲気からは、そんな事を考えさせられた。ラストシーンでは、「死ね」さんが自ら言葉の世界を出ていく演出がある。それは私達が意識してその言葉を言わないようにするのではなく、言葉自体が自ら消えていく、そんな理想の在り方を示しているのではないだろうか。

衣装やダンス、歌、小道具等の完成度の高さ、講評委員一同が驚かされた。また、演出においては、言葉達が議論のシーンが終わると袖にはけるのではなく後ろのパネルにはけたり、「美しいことばを守る会」の人達が出したイエローカード、もしレッドカードがあるのならそれぞれにどんな意味があるのだろうか、と細かな所まで考えさせられた。

講評委員の中で、『「うざい」さんは「死ね」さんと同じようなグループに入ってしまうのでは。この劇における「うざい」さんの存在意義はなんだろうか』ということについて議論を重ねた。結論として、『「うざい」は相手を否定するというより心の内側からやめて欲しい、という純粋な拒絶。「死ね」は相手への要求。「あるある」「ありがとう」「ごめんなさい」は感謝、許容という言葉のそれぞれの違いを観客に受け取って欲しかったのでは』とまとまった。負のイメージを持つ言葉全てが、人を傷つけるために生まれてきた訳では無い。中には私達の心苦しさを吐き出して楽になる為の言葉もある。私達は言葉の意味を理解して、適切な表現をしなければ、と気付かされた。

私達は、「おはよう」「いただきます」「ただいま」という普段の挨拶を惰性のように行っていないだろうか。また、現代では言葉の意味をよく考えずに他人に押し付けるようにして発言をしてしまう節がある。この劇は、そんな私達言葉について見直すきっかけを与えてくれた、非常に見応えのある劇であった。

神奈川県立神奈川総合高校演劇部の皆さん、お疲れ様でした。
ありがとうございました。

